

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：31309

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K04172

研究課題名(和文) 原爆被害者の人生にわたる心の傷と支え

研究課題名(英文) The anchoring support and awfulness throughout A-bomb survivor's life

研究代表者

中嶋 みどり (Nakajima, Midori)

仙台白百合女子大学・人間学部・講師

研究者番号：10412339

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：被爆者の被爆体験以降の心の傷とその後の人生の支えを調査した。健康不安は、終始地雷のようにあり、不調、大病にかかると強まる事例が確認された。一部の被爆者は、就職や結婚の機会に不憫な思いをしたり、仕事にしがみついで生きてきた。結婚や子どもの誕生、成長、趣味、仕事が人生の支えとなっていた。また、被爆体験を伝えることが生き残った者の責務と捉えていた。さらに自身の人生を遠観し、老化に伴う衰えや病気を否定的に捉えず、現状を肯定、感謝し、次世代や周りを重んじていた。彼らは、老年的超越に至っていることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

世界で初めての原爆を体験した被爆者がどのような心の傷つきを抱え、それがその後の長い人生にどのような苦痛を与え、どのように乗り越え、生き延びてきたか、その臨床心理学的理解を知ることが、社会的な役割としても大切である。また、このような未曾有の出来事の発生後の長期的な影響に視点を当てている研究は少なく、現在のようにSNSもなく、社会的貧困であった、このコホートでしか研究できない点でも基調であると考えられる。

研究成果の概要(英文)： This study investigated the anchoring support and awfulness on A-bomb survivor's life. Health anxiety always lurked in A-bomb survivor's mind like land mine, whenever they aren't feel well or suffered some serious illness, the health anxiety feels stronger. When A-bomb survivor faced employment opportunities, or marriage, they had pity experiences, and they clung to their job. A-bomb survivor's anchoring support were marriage, the birth of their child and growth, hobbies and job. They think to tell the A-bomb experiences is an A-bomb survivor's duty. In addition, they took an elevated view of things, without thinking aging and weakness. They affirmed the current situation, the feelings of gratitude, then they respected the next generation and around the world. It suggested they reached gerotranscendence.

研究分野：臨床心理学

キーワード：被爆者 心の支え

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1945年8月6日(月)午前8時15分、一発の原子爆弾が広島市に投下され、市内とその近郊は一瞬にして消えた。死者、放射能を直接浴びた負傷者、放射能を含む黒い雨に打たれた者、この年の12月末までに約14万人が亡くなられた。その後の原爆症による死者の数は、計り知れない。その後の多くの疫学的研究から、被爆者が放射能の影響により身体的な病気に罹りやすいことが実証されており(藤原・山田・高橋、2009;広島市健康福祉局原爆被害対策部調査課、2010)、生存者はその被爆から今もなお70年近く生き続けている。

これまで、原爆体験を心理学的に理解する研究は、数少ないがなされてきた(Lifton,1991;濱谷、2005;中澤、2007)。広島市健康福祉局原爆被害対策部調査課(2010)は、原爆体験が心身状態にもたらしている影響を検討するため、2008年度から2年間実施した被爆者や原爆非体験者(以下、非体験者)等への大規模な悉皆調査研究(原子爆弾被爆実態調査(第二次))を実施した。研究者はこの研究に携わったが、その質問紙調査の最後に感想等の自由記述欄を設けたところ、約6,000枚に記載があり、研究等への活用や記述内容の匿名公開の了承の反応もみられた。当時の惨状、心情、その後の生活など、多種多彩な記述があり、広島市担当課職員と共に検討し、質問紙調査の重要な結果である精神的健康、不安・抑うつの高得点者の記述、健康不安や差別・偏見体験の記述、被爆者健康手帳の取得にまつわる記述や黒い雨未指定地域の方の記述を優先して約100編の被爆者の心の傷に着目し、印象的な記述を報告書に掲載したが、学術的な検討が十分になされているとは言い難い。

以上を踏まえ、広島市が2008年に行った先述の質問紙調査を振り返ったところ、自由記述欄である以上、特に心の傷や心の支えなどの視点は方向付けられていないが、自発的に市民が記述したものの中には、生々しい惨状の光景、被爆後の人生の苦痛を含めた多種多様な心の傷つきや、それらを乗り越えてきた人生、心の支え、次世代に伝えたいメッセージが記載されている。そういった貴重な資料が十分に検討されていないままであることから、再度検討を考えた。具体的には、(1)心の傷という観点から、被爆者だけでなく、非体験者にとって、戦争体験やその後の生活が、人生にどのような苦痛を与え、心の現実となって生きてこられたか、(2)苦境を乗り越えた体験や心の支えを抽出し、そこにどのような人間の姿があったか、大きくは以上2点に着目したい。

2. 研究の目的

本研究は、前項(1)の背景から、被爆者の戦争・被爆体験、その惨状を明らかにすること、被爆者だけでなく、非体験者の体験した戦争体験や被爆後の生活で抱えた心の傷を明らかにすること、そして苦境を乗り越えた体験や心の支えと形成の様相を検討することを目的とした。

なお、被爆者を対象とした調査は、論文だけでなく、多様な手記等にまとめられた体験談の中にも、多くの心理的状态が語られているはずであるが、それを学術的な視点からまとめられ、検討されたものは、非常に少ない。よって、広島の被爆者の体験を対象とした文献を基本に、心の傷と苦境への向き合い方、支え、次世代のメッセージを以下の視点からまとめ、概観したい。そのように全体像を検討した上で、2008年に行われた原子爆弾被爆実態調査(第二次)の質問紙調査の自由記述から、同様に、被爆者の心の傷と苦境への向き合い方、支え、次世代のメッセージを抽出して、その類似点や相違点を比較・検討を行いたい。その上で、可能であれば、被爆者だけでなく非体験者に面接調査を行い、心の傷への向き合い方や時間的変化や心の支えの形成過程など、より考察を深めたい。

3. 研究の方法

研究1: 被爆者の心理的状态に関する文献展望

被爆者の体験を対象とした文献、記事や2008年に行われた原子爆弾被爆実態調査(第二次)の質問紙調査の自由記述を軸に心の傷と苦境への向き合い方、支え、次世代のメッセージを概観した。

<素材>被爆者の体験を対象とした文献24件、HPに記載されているインタビュー調査98人、2008年に行われた原子爆弾被爆実態調査(第二次)の質問紙調査の自由記述6000人分(非体験者含む)

具体的には、(1)被爆者の戦争体験、被爆時の惨状・体験、(2)被爆者の戦後の苦境体験の内容、それとどのように向き合い、乗り越えたか、(3)被爆者の人生の支え、(4)次世代に伝えたいこと、(5)その他大切と思われる視点から概観し、文献展望を行った。

研究2: 被爆者の心の傷と人生の支え、次世代に伝えたいメッセージの面談調査

<対象者>被爆者3名(男性2名、女性1名、調査時78歳~83歳)明らかに認知症の疑い・診断を受けておらず、何らかの政治的な活動など、イデオロギッシュな思想、行動がない方をお願いした。

<面談時間および内容>最大2時間までとし、具体的な聴取内容は、被爆時の体験、その後のように、辛い体験を乗り越えてきたか、心の支えがいつ頃形成されたかを、人生の時間軸に沿って話をうかがった。特に大切だった考え、伝えたいメッセージを含め、質的検討を行った。

<倫理>面談調査にあたっては、研究の主旨を説明し、デジタルビデオカメラや録音での調査をお願いするにあたっては、研究に携わる者以外に分析の際も含め、公開されることはないこと、

拒否も可能であることを説明し、自発的な意志に基づく同意をとって行う。同意が得られない場合は、筆記等、許可が得られる範囲での記録で聴取を行った。

4. 研究成果

研究1： 被爆者の心理的状态に関する文献展望

本報告書では、(1)被爆者の戦争体験、被爆時の惨状・体験、(5)その他は、割愛する。

(2) 被爆者の戦後の苦境体験の内容、それとどのように向き合い、乗り越えたか

この点については、広島市が行った原子爆弾被爆実態調査(第二次)でも、重要な要因であった。健康不安と差別・偏見を中心に取り上げる。また、年齢は、各文献の調査時のものである。

<健康不安>被爆後、原爆症に罹患し、長期間の発熱や消火器症状、脱毛等に苦しんだ経験で死を意識した事例も多く見られた。また、特に大きな不調なく成長し、成人をした人でも、不調になると、「原爆のせいではないか」「死ぬんじゃないか」と因果を感じた(71歳男性)。それ以降も、何かと不調や大きな病気になると、「原爆のせいではないか」と思い、気が重たくなる(84歳女性、76歳男性)など、地雷のようにいつもは見えないところにあるが、何らかの関連がある不調や思い出させられる情報があると、不安が大きくなる傾向が確認された。また、多くの文献や手記でも指摘されているように、8月6日や8月9日になると、不調になる人、気分がふさぎこんでしまうため、外出しない人も、一定数みられた。

<差別・偏見>被爆後、親がいない被爆者は、親戚の家に世話になるなど、苦境が強いられた。快く受け入れて、育てていただいた恩義が報告されているものもあった。進学・就職等に当たっては、保証人(保護者が)がいないために、養育家庭での自営業を手伝ったり、職人になるしかなかったことを語る被爆者も多かった。よって自ら肯定した道を選ぶことができないながらも、与えられた道で、必死に生きることを考えて、仕事に取り組み続けてきた人も非常に多かった。また、「容姿をいじめられたことで、ずっと友達がいなかった」(70歳女性)、「被爆者ということを隠して結婚し、影響を恐れて子どもを持たなかったことへの悔いがある」と妻に対する申し訳なさを語った人もいた(74歳男性)。また、子どもが結婚する際に、広島の人間であることを相手の家庭に気にされたり、「障害児が生まれるかもしれない」と結婚を断られた人もいた。

(3) 被爆者の人生の支え

人生の支えについては、多種多様なものが語られた。多かったのは、「前向きに物事を考える」ことであり、これに関連するものとして、「くよくよしない」「原爆のことは考えないようにする」「もうなるようにしかならない」「友達と集まって元気に過ごす」などがあつた。「親がいたら・・・」と思うことはあつたが、自分1人だけではないので、(78歳女性)という人も多数いた。さらに、自身の人生を「日本の復興や街の成長の上り調子を見ることができた」と語る者もあり、大変な苦労に目を向けるより、誠心誠意、自分の生活の中で与えられていることをこなし、報われてきた面を語られているものも多かった。

また、「人とのつながり」を挙げる人も多かった。未成人の被爆者にとっては、周りにいる大人が生活するためには周りや仲良く安定した関係を維持することが特に必要であった。被爆によって家族を奪われた被爆者にとっては、「家族」は非常に大切な存在であり、きょうだいの面倒を見る、家を支える使命感を持ち、自身が頑張って生きていく力となっており、必死だったと語る人も多かった。また、結婚できた時に、「自分をもらってくれる人がいた」と思えた人、「子どもの成長が何よりの幸せ」と語る人も多かった。結婚を自らの存在意義を一生認められる人に出会えたこととして、大切なことと思って生きてこられた人も多く、子どもが五体満足で誕生してきたことだけで、「十分嬉しい」と自らの命を次世代につなぐことができたのが尊いことと語る人もいた。「友達」も大切な存在で、今でも定期的に会うと語る人も非常に多く、自然と幼少期の話になりながら、同士であることに変わりないと絆を強くしているようであった。

「仕事」という人も非常に多く、「生きていくためには、仕事にかじりつく以外ない」という人もいれば、「仕事で、人に喜んでもらえる体験が嬉しかった」と生きる実感を持っていたことを語る人も多数いた。何か大きな業績を成し遂げることが大切でなく、丁寧に仕事をする、まずは目の前にある人に誠心誠意を伝えながら対応することが大切だという人も多かった。

「生き残ったことに意味がある」と自身の命のありがたさや運命を感じると語る人も非常に多かった。「何故自分が生き残ったか」をいくら自問自答しても答えが出る課題ではない。生き残った罪悪感、生き残っても心の傷や苦境が伴う人生を送りながら、「生きている自分は、精一杯生きることが使命」「生き残ったことに何か意味がある」「原爆のことを伝えるのは生かされた人間の責務」「生き残ったことに感謝」「生き残って幸せ。言葉では言い表せない」等、色々な言葉で多数の人が語っておられた。生き残ったことで、感謝や奉仕の大切さ、平和の尊さを感じながら、生きてこられた人も多かった。

(4) 次世代に伝えたいこと

被爆者が次世代に伝えたいことは、「このようなことが二度とあってはならない」「戦争や核はいけない」ということに尽きるとしか述べようがない。「自分が原爆に遭ったのも、何らかの意味があるので子どもに伝えたい」(77歳男性)、「自分のできる範囲で役に立てることをする大切さを伝えたい」(79歳女性)などが多かった。今のように国民がテレビやSNSに接することも

なく、社会的貧困だった時代に原爆が投下され、一気に焼け野原となり、家族もコミュニティも、なじみの風景も失ったという未曾有の被爆体験は、戦争を知らない時代の人間には、被爆者に肉薄するほどの想像ができるとは限らない。人間がこのような状況に置かれた時に、どのようなことを感じるかを知り、消すことができないその体験を抱えて生きることを体現してこられた被爆者から、被爆体験やその人生を残していただくことは、災害などが多い昨今においても、同様の未曾有の体験をし、それを抱えて生きる苦境と苦境を乗り越えて生きていく考え方を示唆していると思われる。

研究2：被爆者の心の傷と人生の支え、次世代に伝えたいメッセージの面談調査

研究者が被爆地広島から、拠点が離れたため、調査日程が調整しにくくなり、3名の被爆者に調査したことで終わってしまった。少ないデータでもあり、面談内容の個人差も大きいことから、報告書の知見として、十分なレベルに至るデータや考察が十分でないと評価され、一般化は避けたい。

しかしながら、研究1で挙げられた、「人とのつながり」は3名とも一貫してあげており、家族、友達、仕事仲間など、いつも自分の生活の中にある人と波風を立てずに、良好な関係を維持していくことで、人生に張り合いをもってきたことが語られた。「家族」も大切な存在で、子どもの成長が生きることを頑張るための力になっており、仕事を頑張る、家族を支えることともあいまって、「足るを知る」という姿勢で生きてこられたと語られていた。3名とも、成人するまでは、「ただ必死に生きること、目の前のことしか考えていなかったと思う」、「被爆体験は考えないようにしてきた」、「でも、何か（刺激になるもの）があると考えてしまう」と語られた。老年期になり、自分の人生の統合を考えるにあたって、「生かされたものとして、伝えていくことを大切な任務と感じている」という思いを語っていた。うち1名（男性）は、現在も被爆体験を伝える活動をしていたが、8月に原爆の話がされているのを聞いている中学生が「そんなの知らねえ」という言葉に、「これは、絶対いけない」と思い、この活動を始めたと言っていた。現に、報道等でも、語り部のお話を聞いた小学生が「コンビニがなかったの?」と回答したり、広島と長崎の原爆投下日を知らない割合が増えていることが指摘されている。このような現状から、継承する歴史としては重要なことであり、その任務の大切さを感じていると語っておられた。

また、「アメリカは憎いと思っていたけど、年を取って私も丸くなって、広島に来ている外国人を見ると、理解しようとしている人を憎んではいけないと思うようになった」（女性）と肩っておられた。3名とも、「老年的超越」とも言われる穏やかな幸福感を3名が感じていた。小さなことにこだわらず、物事を達観している姿勢が非常に強い印象として残った。

今後の課題

研究2の面談調査では、十分な人数の研究協力者に接することができなかった。また、研究2の途中、被爆地を離れた被爆者に接することによって、「被爆者であることをなかなかわかりあえない中、生きてきた面がある」という語りもあった。このことは、災害等が多い昨今、なじみの地域を離れて生活をせざるを得なくなった人の人生を知ることにもつながる研究にもなると考えられる。よって、今後、被爆後、被爆地・被爆地以外にこだわらず、未曾有の体験をし、長い人生を生き抜いてこられた人の生き方や人生の支えを知る研究が必要であると考えられる。

また、被爆者らが大切に生きてこられた考えには、「前向きに物事を考えること」、それに関連した考えには「自分だけでない」、「友達と集まって元気に過ごす」、「街の発展を見ることができた人生」という考えもあった。これらの点について、被爆地でずっと生きてこられた被爆者は、暗黙裡のうちに身近に分かり合える人や風景があったが、被爆後、被爆地を離れ、県外を離れて人生を生きてこられた人には、そのような暗黙裡の支えが十分であったとはいえない。このように未曾有の出来事に遭遇し、住み慣れた地を離れた人の一生については、あまり知られるとは限らず、今後の研究課題である。近年、災害等で長く住み慣れた地を離れざるを得ない人が出ている現状から、検討が必要であるとも考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 中嶋みどり
2. 発表標題 ヒロシマ原爆被害者の人生を支えたもの
3. 学会等名 仙台白百合女子大学人間発達研究センター第1回研究会・研究懇話会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Midori NAKAJIMA
2. 発表標題 The content analysis of A-bomb experience and psychological sequelae in Hiroshima A-bomb survivors.
3. 学会等名 15th European Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Midori NAKAJIMA
2. 発表標題 The content analysis of A-bomb survivor's psychological meanings of telling A-bomb's experience throughout their lives.
3. 学会等名 16th European Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----